

## 丸森町筆甫地区における新規住民の受け入れ

上村 紋代

### I はじめに

現在、中山間地域では少子高齢化が進み、多くの地域が過疎化に悩まされている。その対策の一環として新たな住民の移住を進める NPO 法人の活動や行政の施策が増えている。しかし、受け入れる側の地域住民との意識のずれや定住率など、取り組みを進める上で様々な問題を抱えている。

今回の調査で対象地域に選定した丸森町では、行政によるクライנגルテン事業や定住促進事業、各地区独自の移住ネットワーク形成など移住に対して積極的な対応が取られている。そして、丸森町に新たに移住した方々の定住率が高い。そこで本調査では、全く新しい場所に、進学や仕事の関係ではなく生活を目的に移動するとは移住を希望する人々にとってどういったことを意味するのか。何が人々を丸森町へ惹き寄せ、長期定住を可能にしているのかを明らかにする。

以下、II 章では対象地域である丸森町の概要を述べる。III 章では、丸森町内での新規住民の位置づけを探る。1 節・2 節では行政による新規住民に関する施策について述べ、3 節では丸森地区で行った聞き取り調査に基づき、地域住民の新規住民に対する認識を述べる。IV 章では丸森地区内でも特に新規住民の多い筆甫地区<sup>ひっぽ</sup>での、新規住民と地域住民の意識のずれや関わり合いについて述べる。V 章では行政と自治会の役割分担についてまとめ、筆甫地区で新規住民が多い理由について叙述する。

なお、以下では地縁・血縁のない地域を訪れ定住の意思を持ち生活を始めた人（一般的な I ターン者）を「新規住民」とし、地縁・血縁がありその地域で幼少時から生活している人、または地縁・血縁はあるが別の地域である程度働いてから戻ってきた人（U ターン者）を「地域住民」とする。

### II 宮城県伊具郡丸森町について

丸森町は宮城県の最南部にあり（図 1）、仙台駅からは電車で約 1 時間の距離である。総面積は 273.3 km<sup>2</sup>であり、山林が約 67%を占めている（図 2）。阿武隈山脈に囲まれた山間の町であり、年間平均気温は 12℃前後、市街地は盆地を中心に形成されている。町の北部を阿武隈川が貫流しており、一年を通して観光の目玉である川下りが行われている。

現在の丸森町は 1954 年 12 月の 2 町 6 村（丸森町・金山町・筆甫村・大内村・小斎村・館矢間村・大張村・耕野村）の合併により成立した。人口のピークは 1950 年の世帯数 4,749・人口 29,998 人であり、それ以降世帯数はほぼ変化がないものの人口は減少し、現在の人口は 15,901 人である。過疎地域自立促進特別措置法（2009 年 4 月 1 日施行）により過疎地域として指定され、現在高齢化率は 33.1%、合計特殊出生率は 1.28 であり少子高齢化は今後も続くことが予想される。

産業は第二次産業従事者が 3,502 人（約 43%）と最も多いが、第三次産業従事者の 3,331 人（約 41%）と大差はなく、第一次産業従事者が 1,286 人（約 16%）となっている。第一次

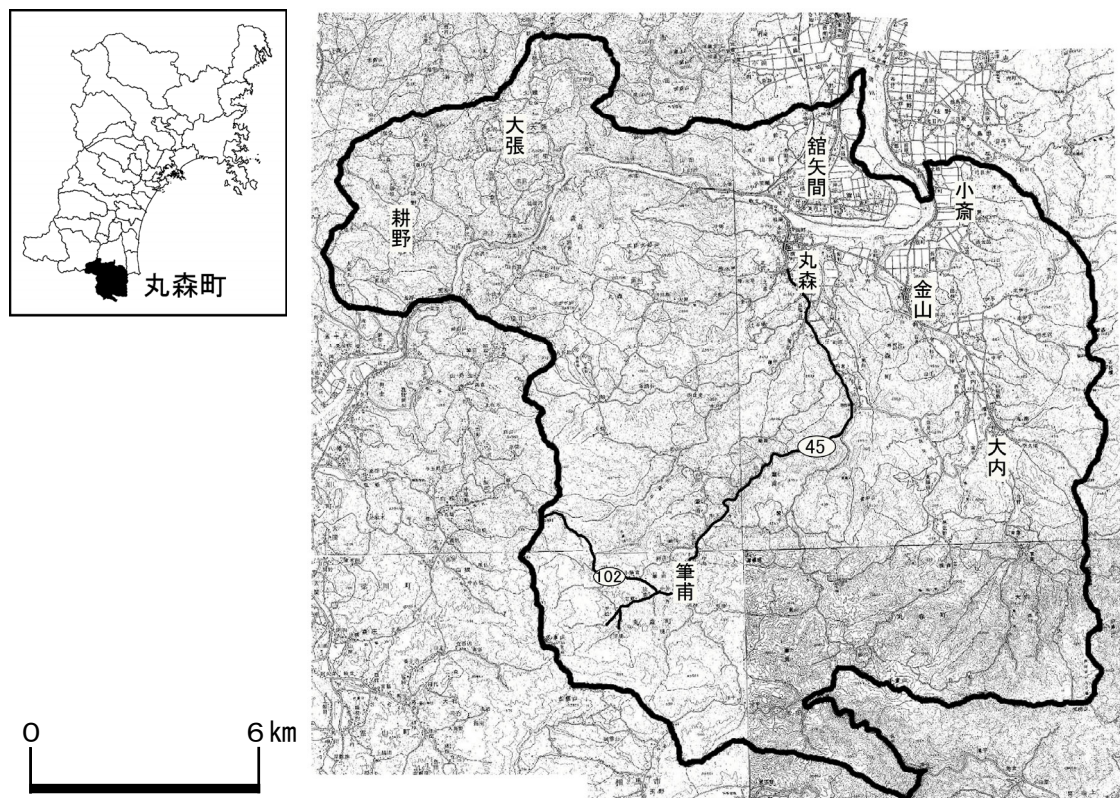


図1 丸森町ならびに筆甫地区の位置

(国土地理院5万分の1地形図 1980年発行より作成)

産業は水稲・畜産・野菜等が中心の複合農業である。養蚕が1910～30年代まで盛んであり、1950年代には県内有数の出荷額を誇ったが、化学繊維に押され衰退し産出量は激減した。

丸森町は主に合併前の旧町村をもとに8地区に分かれ、町の名を冠する丸森地区が町の中心部となっている。もともと丸森は宮城県内でも有数の養蚕地として潤っていた。町の上部を流れる阿武隈川により舟運が発達し、町場として栄えた。このため現在も丸森地区は他地区に比

べ小売店が多い。その後、阿武隈急行線（当時は国鉄丸森線）が丸森町の北部を通ったが、汽車の煙が養蚕に被害を与えることを防ぐため、町の中心部を通ることはなかった。

土地が比較的平坦な丸森地区には町役場、銀行支店、歴史的価値が高く観光の目玉でもある齊理屋敷、丸森町の歴史展示施設、観光案内所などの主要施設がそろそろ。しかし、同地区の丸森駅付近には集合住宅が多く見られたが公共施設はあまりない。駅付近よりも阿武隈川を渡った丸森地区南部に各種施設が集中しており、活気があるようだった。筆甫・大張・耕野地区は棚田が多い山間地である。耕野地区にも阿武隈急行

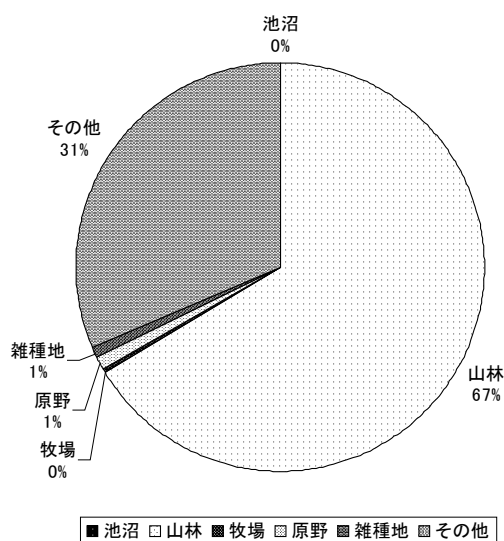


図2 丸森町の地目別土地利用面積(2006年)

(町民税務課「固定資産概要調書」より作成)

表1 行政による定住者政策年表

西暦(和暦)	
1988(昭和63年)	阿武隈急行線全線開通・県立自然公園指定
1996(平成8年)	「まるもり元気家族」という定住促進のためのガイドブックを作成
2000(平成12年)	不動尊クライנגアルテン(市民農園)開設
2004(平成16年)	「まるごりまるごとおすそわけまっぷ」等ガイドブック作成のための資源調査実施・定住促進事業
2005(平成17年)	筆甫クライנגアルテン(市民農園)開設
2006(平成18年)	「しあわせ実感・丸森いきいき定住促進事業」施行

(町役場での聞き取り調査、河北新報の新聞記事、丸森町 HP より作成)

線のあぶくま駅があるが、丸森駅と異なり周囲には観光案内所と無人野菜販売所しかなく、耕野地区の中心部からは遠い。阿武隈川の上流にあたるためこの駅から丸森地区まで川下りすることも出来るが、筆者が訪問した時はちょうど渇水であり体験は叶わなかった。金山地区は城跡があり歴史的遺跡が数多くある。

このように各地区はそれぞれ特色があり地理的特性が大きく異なるため、丸森町としてひとくりに語ることは難しいという現状もある。丸森町内は自転車で回れるだろうと考えていたが各地区間は距離が大きかった。自転車や歩行者が通る余地のない狭い道路で繋がつている箇所もあり、交通安全上危険と判断されたため、今回の調査では全ての地区を見て回ることは出来なかった。

### Ⅲ 丸森町内での新規住民の位置づけ

#### 1. 行政のこれまでの取り組み

前述したように丸森町は過疎地域に指定されている。人口減少の緩和策として、これまで町は新規住民を誘致する施策を行ってきた（表1）。

ハード面の取り組みとしてはクライングアルテン（滞在型市民農園）<sup>1)</sup>の開設がある。このクライングアルテンがもたらす定住効果については後段で詳しく述べる。現在の指針となっている第4次丸森町長期総合計画では定住環境づくりプロジェクトを重要施策の一つとして挙げ、宅地分譲地「グリーンステージ上滝」の販売や定住促進住宅の入居を進めている。定住促進事業は、新婚世帯・子育て世帯・事業者にターゲットが絞られ、新規住民の誘致だけではなく丸森町の若者世代の流出防止も主な目的となっている。またこのような住居は丸森町の観光拠点である上滝集落や町中心部に多く、地域的に偏っていると考えられる。

次にソフト面の取り組みに関して、移住希望者にとって重要な問題の一つに住居の確保がある。新規住民誘致政策を行う場合、地域住民と新規住民間の橋渡しを担うことが多い行政機関であるが、丸森町では行政による空き家紹介は現在行われていない。2006年までは空き家を把握していたが、それ以降は行政ではなく各地区の世話役から移住希望者へ情報提供が行われることになった。行政は訪れた移住希望者に対して空き家そのものを紹介するのではなく、各地区の世話役へ連絡する。ここでは役場と各地区間の公的連絡ネットワークよりも、職員が持つ個人的なネットワークが活かされている。つまり行政は公的な繋がりから私的な繋がりへと移行する架け橋となっているのである。

以上のように情報提供者が変化した背景には主に2つの理由が挙げられる。1つ目は移住希望者と地域住民との壁を低くすることである。行政が斡旋したとしても、実際その地区に住み



写真1 不動尊クラインガルテン  
(2010年8月27日著者撮影)

地域住民と関わるのは新規住民本人である。行政主導だと、なされるがまま受け身のスタンスになってしまいがちで、また地域住民も「役場が斡旋してきたのだから」と過度の信頼を寄せてしまうことになる。夜逃げ同然でとにかく住居を希望するケースや、希望した空き家と提供された空き家が違っていたというケースがあり、このような問題を防がなければならなかった。

2 つ目は新規住民が来てほしい地区は独自に空き家を調査しているため、新規住民に対し行政よりも柔軟な対応が望めたからである。2010

年4月から各地区に自治組織としてまちづくりセンターが置かれた。まちづくりセンター内部の地域活性化を担う部署は各地区で名称が異なり、ブルーベリーの摘み取り会や盆踊り大会等独自の活動を行うなどの取り組みが見られる。そこで、各地区の活動の差について尋ねたところ、より交通利便性や立地条件の悪い地区の方が活発的だという。

行政はハード面では住居に関する支援を主に行い、ソフト面での支援を個々の自治会に任せるといった、新規住民から見れば距離のある立ち位置にいると考えられる。行政では、個性の強い各地区に対し、各地区が独自に対応したほうが新規住民と地域住民の両者にとって望ましいとしており、定住事業政策の続行も検討する必要があるとも考えている。

なお、丸森町の交流人口は年間 56 万人と言われている。現在エコツーリズム推進事業が進行しており、定住政策よりも観光政策に力を入れているように見受けられた。ここでのエコツーリズムは農山村での余暇活動を意味する。

## 2. クラインガルテンの設立経緯と利用者

2000 年に不動尊クラインガルテン（滞在型市民農園）（写真1）が開設された。この施設は第3次丸森町長期総合計画で挙げられた「丸森型グリーンツーリズム」<sup>2)</sup>の一環として導入されたものである。クラインガルテン導入の背景には桑畑の耕作放棄、農家の高齢化があった。かつて県内一であった養蚕農家は激減し、現在は数軒となり、桑畑を中心とした農地の遊休化が拡大したのである。当時は市民農園に関する紙媒体での情報が少なかったため、先進的事例であった長野県松本市の坊主山クラインガルテンを視察した。その後、住民説明会を開催し、1997 年に事業が始まった。この滞在型市民農園は好評を博し、5年後には筆甫地区にも同様のクラインガルテンが開設された。現在は町から委託された市民農園管理組合によって管理運営されている。利用者の住居は小屋として登録されている。利用者は仙台市民が多く、関東圏からの利用者は少数である。利用者の滞在期間は現住地からの距離によって異なる。仙台など近い人だと毎週末、関東の人は1～2週間と長い休みを取りまとめてくる人が多い。

丸森町での新規住民の定住年数が長い理由として、クラインガルテンが一つのクッションになり新規住民としての準備期間を与えている可能性が考えられる。また町役場でも同様の回答をいただいた。しかし、不動尊クラインガルテンの利用者に聞き取り調査を行ったところ、現在の利用者は定住の意思はないとする回答が多かった。以下に、調査結果の一部を紹介する。

利用者・Aさん、仙台から

「ここには夏の間良く来る。冬は水はけが悪くて地面が凍るからあまり来ない。農業は使っていませんよ。ここで有機農業をやり始めてから、無理に綺麗な形の野菜を見ると怖いと思うようになったね。（始めたきっかけはという質問に対し）新聞で（クラインガルテンを）見て軽く、やってみるか、程度でした。今は週一回のペースで来ますよ。（周辺の民家との交流という質問に対し）周りの人と交流することはあまりないし、（不動産以外の）他の地区に行く気もないですね。」（括弧内は著者による補足）

また、利用の主な目的は野菜栽培だけではなく、周辺散策など暮らしを楽しむといった様子も見られた。

利用者・Bさん、仙台から

「夏も冬も来る。定年後にここに来た。暮から正月によく来て、ここを拠点に周囲でキノコ狩りなどして遊びますよ。景色を気に入って借りることにしたんです。ここが盛況なのは管理人がべたべたしないってこともあるだろうね。あんまり干渉しないというか…。でも必要な時は助けてくれるし、この距離感がいいんだろうね。」

このクラインガルテンは予約希望者がいるほど人気を博している。筆甫地区のクラインガルテンは不動産地域に比べると寒く交通の便も良くないため、立地条件から定年退職者・高齢者は不動産クラインガルテンに多いことが分かった。

10年間で4世帯がクラインガルテンを経て丸森町の新規住民となったが、全体の傾向として利用者の丸森定住の意志は弱く、クラインガルテンが新規住民になるためのステップの一部として機能するのは難しいかもしれない。

新規住民は丸森町住民のカテゴリーの一つとして成り立つが、その存在はあくまでマイノリティであり、行政は新規住民から観光者へと政策の重点を移しているようである。

### 3. 地域住民の新規住民に対する認識

新規住民が多いと宮城県内の他市町から認識されている丸森町だが、実際に町内全てに新規住民がいるわけではなく、その居住地区は限られている。また、移住しているとしても住民票は移していないケースもあるため、新規住民の数を正確に把握することは難しい。行政や観光案内所等での聞き取り調査によって得た情報で大まかに述べると、新規住民が多いとされるのは筆甫・耕野地区の2地区である。

しかし、丸森地区の一般住民（行政業務に関わっていない方々）に新規住民について尋ねたところ、新規住民の存在については認識が薄かった。例えば、丸森駅近くで小売店を営んでいる自営業者のTさんは、

「周囲の住宅にいる人はころころ変わる。長い人で5年くらいかな。2～3年くらいしたら皆家立ててどっか行くよ。どこへ行くのかは分からないなあ。（新規





写真2 不動尊地区から筆甫地区へ続く道  
(2010年9月11日著者撮影)

住民はいるのかという質問に対して)  
丸森町に移住した人(ママ)はいない  
よ。」

と述べている。駅周辺には住宅が多いが、  
それが必ずしも定住には結びついていない  
ようだ。

一方、情報の集まる場では新規住民と地  
域住民とのネットワークが形成されている。

「まるもり水とみどりの百貨店」(観光案内  
施設)では各地区から所用で丸森地区へ来

た地域住民同士による情報交換の場が形成されており、そこでは新規住民のことから地域活性化まで幅広く意見が交わされていた<sup>3)</sup>。

新規住民の多い町として外部に認識されているとしても、その町の一地域のみ集中している場合はむしろ内部に住む地域住民の方が新規住民という存在に対して認識が薄いようである。Tさんや「まるもり水とみどりの百貨店」間で認識の違いが顕著のように、町の中心であるため最も情報が集まりやすい丸森地区では、新規住民の存在に関して捉え方に個人差が見受けられた。新規住民というカテゴリーは町全体には浸透しておらず、局所的なものであると分かった。町に対する外部からのイメージと内部のイメージは一致しているわけではない。

#### IV 筆甫地区における新規住民

丸森地区や行政での聞き取り調査により、新規住民の多い地区として挙げられたのが筆甫地区と耕野地区である。本調査では筆甫地区を対象地域に、新規住民3名と地域住民3名に対し聞き取り調査を行った。

##### 1. 筆甫地区の概要

筆甫地区は、民俗学者柳田國男の調査団が調査に入り、「宮城の遠野」とも呼ばれた自然が豊かな山村である(図1参照、写真2)。丸森町の最南端に位置し、2010年7月末時点の人口は835人、高齢化率は41%である。小学校児童は16名で、中学校は2007年3月に閉校した。1954年頃に人口3,000人を超えたが、以後現在まで減少を続けている。

標高300~450mの比較的高地にあり、阿武隈高地の最北部に位置する。地区の総面積は74km<sup>2</sup>である。自然環境としては、植生の北限と南限の交わる地区だと言われ、貴重な動植物が数多く生息している。太平洋側の地域のため冬季は豪雪とならないものの、年に50cm程度の積雪があり道路も凍結する。

地名の由来は諸説あるが、伊達政宗が領土内の太閤検地をした時に最初に検地を行ったことから「筆のはじめ=筆甫」となったという説が有力である。しかし「ひつほ」という言葉はそれ以前からも使われたと言われており定かではない。

##### 2. 筆甫地区の魅力

筆甫地区の魅力について考えると、まず1つ目に挙げられるのは筆甫の風景である。棚田や

小川といった景色から連想される日本の里山のイメージがそっくり当てはまる。新規住民が移住を希望した際、日本の原風景のような場所で農業をしたいということがきっかけで移住を決意した方が多かった。

2つ目は、地域住民の持つ暖かさ、人間性である。新規住民を受け入れることに成功したのは移住を積極的に受け入れる地域住民がいたからである。筆甫地区がこのように新規住民受け入れに積極的になったのは、地域住民が減っていくのが分かったからではないかと新規住民のAさんは述べる。筆甫地区の主要な道路は県道45号線と102号線だが、この県道を使うのは筆甫に用事のある人が大半であり、他地区と異なり筆甫は通過地区にはなりえない。だからこそ「人がいなくなるのがよく見える」のではないだろうか。また出生数が0になった年があり、1学年欠落した。これらのことを踏まえ、筆甫地区は危機感を強めていった。そして新規住民受け入れへと繋がったのである。

### 3. 空き家紹介

I章で述べたように、現在、移住希望者への空き家紹介は地区レベルで行われている。ところが空き家の分布は地図上に示されているわけではない。空き家を把握するまちづくりセンター職員で新規住民のAさんは次のように述べている。

「地図に起こしたいとは思ってるんですがね…。50軒ぐらい空き家はありますが、使えるのは5～6軒です。空き家って言っても種類があります。これ家？って思うぐらいすごいのか。」

このように空き家の情報はAさんの頭の中にあり、移住を希望する人には地図を手渡して終わり、ではなく共に足を運ぶようである。このように地区レベルでは、資料提示で終わる形式的な紹介ではなく、空き家の分布や傷みの程度などを細かく把握しているため、より綿密な紹介がなされていると言える。

しかし、使用できる空き家の絶対数が少ないという問題がある。そこには地域住民との意識の差異があった。地域住民に対し筆甫地区内に空き家はあるのかという問いに対して計4軒の回答を得たが、これはまちづくりセンター職員のAさんと意見が異なる。筆者や新規移住希望者が「空き家」だと認識する家は「50軒ぐらい」（新規住民Aさん）でも、その家を所有する地域住民からすると、そこは空き家ではなく物置、仏壇を置く等、目的のある住居なのである。ゆえに使用できる空き家は「5～6軒」（新規住民Aさん）という回答が得られたのである。普段は使用していないが盆と正月に供養のため帰ってくる家や「私のところにも家はあるけど、あれは物置だからね」（地域住民Bさん）とのように物置として扱われている家もある。

一方、新規住民に関して地域住民3名に聞いたところ、3名とも新規住民は増えて欲しいと言う。「若い人がいないとだめ」（地域住民Cさん）、「増えて欲しい。昔は道に出ると1時間に5人位会った。今は全くいない」（地域住民Bさん）とのことである。

以上のことから、地区の人数が増えることはよいが、そこに新規住民の住居は考慮されていないということがわかる。筆甫地区は広いため敷地面積的には家を建てる余裕はある。しかし地区に入ってくる若者はそれほど資金を持たない者が多い。新規住民が地区へ入るには、家を建てたくても建てられないが、貸借も難しい現実がある。ある程度自分たちもリスクを負わな



写真3 新規住民がリフォームを行って使っている家屋

(2010年9月11日著者撮影)

ければという意識を地域住民が持たない限り、新規住民の住居取得の困難さはなくなるだろう。

#### 4. 新規住民間の連携—ひっぽさこらいんUIターンネット—

筆甫地区には、新規住民をサポートする組織として「ひっぽさこらいんUIターンネット」がある。「ひっぽさこらいん」とは「ひっぽおいでよ」という意味である。2003年に地域住民7名、新規住民3名で設立され、現在は地

域住民8名、新規住民10名の計18名で活動を行っている。主な活動は、移住希望者からの相談受付、受け入れ後相談や情報提供、新規住民の増加を図る活動、空き家や農地などの情報収集である。このような組織が確立されていることで、移住希望者も安心感を抱く。WebでHPも公開していて、そのHPを見て筆甫へ来て新規住民になった方もいた。

しかし、空き家があっても「手直し」を行うのは新規住民自身である(写真3)。床の張り替えや壁の張り替えなどを手作業で行う。「手直しに1年かかった人もいれば2カ月でよい人もいる」(新規住民Aさん)。基本的に一人で行い、例えば女性でも手取り足取り教えてくれるわけではない。だが、やり方が分からない時は尋ねれば手助けをしてくれる。そこには自立を重んじる風潮がある。自分の手が入った住居だからこそ愛着も湧く。甘やかしすぎない、けれど冷たくもない適度な距離感があった。

#### 5. 地域住民と新規住民の関わり合い

近隣約10軒で構成される「となり組」(連帯責任・税の滞納を防ぐことが目的)や春と秋に2回行われる「けいやく会」(部落の決めごとを決める)、「さわ会」(住民を家に集めて料理を持ち寄り飲み会・担当制)、「婦人防火クラブ」(婦人会とは異なる)等の住民同士の集まりが存在したが、地域住民と新規住民という分け方はなかった。最も大きい地域組織は「けいやく会」であるが、個々の負担も大きくなっていくため参加は任意であるようだ。

住民同士の接触の頻度には、地域住民・新規住民というカテゴリーよりも家の距離が関係しており、積極的に地域社会へ溶け込もうとする新規住民の姿勢を見た。そこでは何か大きな行事や連絡事があるから会うのではなく、もっとゆるやかな、例えば談話を目的とした付き合いがあった。世間話をしに行くことは、ある意味、何か用事のため会わねばならないことよりも難しい。地域社会との関わり合いを持たなくとも生活していくことは可能だろう。けれど新規住民と地域住民との交流の場については、聞き取りさせていただいた新規住民全員が普段から「近所と付き合う」ことが大切で特別な会が必要ではないと述べた。またこのような新規住民の姿勢と地域住民の考えも「日々の生活が大事」だと一致していた。

新しく住民が入ったことにより、伝統芸能の神楽を伝え続けることが出来て嬉しいというお話も伺い、新規住民は地域に歓迎されていることを感じた。



## 6. 希望する新規住民像

どのような人が今後地区に入ってきて欲しいのか。そこには地域住民と新規住民で希望像が若干異なっていた。両者とも同じだったのは「20～40 代の人」、「能動的な人」を希望することである。「年齢は関係ない」とする地域住民Bさんは「自分でやる人が来て欲しい」と述べた。それは新規住民に限ったことではなく、筆甫出身者（U ターン者）に対しても向けられたものであった。筆甫は宮城県内では最南端だが、それでも冬になれば水道の手入れなどをしておかないと生活に支障を及ぼす。高齢者が多い筆甫だからこそ、自分の手で出来なければ生活することは厳しい。「能動的」とは生活上必須な項目なのである。

共通項目として地域住民は「若い人」、「夫婦」という年齢を優先して挙げたのに対し、新規住民は「手に職を持つ人」、「様々な人が来て欲しい」、「地元の人ときちんと交流できればどんな人でもよい」と人間性・技術力を重視する。地域住民は高齢者が多く、地区が存続するためには若い人々が必要であるため年齢や配偶者の有無が優先するのだろう。

一方、これから筆甫地区で生活するにあたり収入源として考えられるのは農業である。だが新規移住希望者の多くは農家出身者ではなく、また「来るのは器用な人ばかりではない。普通の人が来る」（新規住民Aさん）。それは現在までの新規住民の傾向から読み解くことが出来る。前述したように空き家取得は難しく、農地取得も簡単にいくものではない。農業で参入する場合は「地域の受け入れ体制の構築」、「農業経営の工夫」、「先行の新規参入者の役割」等の条件をクリアしなければ、地域に定着することは難しい（小金澤・奥塚 2008）。また、中山間地の新規住民の職業は偏りがあることが既に指摘されている。高い専門性を持つか自営業といった確固とした収入源を持たなければ過疎地域で暮らしていくことは難しい。また、自営業の場合、日中地区にすることが出来るのも大きなメリットとなる。新規住民の意見は現実を踏まえたものであり、地域住民と新規住民の間では新規住民像に関して視点が異なることが分かった。

## V おわりに

最後に、本調査のまとめとして、移住に関する行政と自治会の立ち位置について整理し、筆甫地区が新規住民を呼び寄せ長期定住を可能にした理由について論じる。また、今後このような調査を行うにあたっての懸念事項も述べる。

### 1. 行政と自治会の関係

I 章でも述べたように、行政は政策上定住よりも観光を重視している。町全体の知名度を上げ経済効果を狙う大規模な観光は町が行い、各地区は地区存続のため新規住民を確保する定住事業を行う。町と地区で担当事業について明文化されてはいないが、担い手の住み分けは出来ていると考えてよいだろう。

また、観光面に関しても民間と行政では魅力とするものが若干異なっている。阿武隈ライン舟下りの運営をはじめ齊理屋敷や不動尊キャンプ場等の主要観光施設の管理運営は財団法人阿武隈ライン保勝会<sup>4)</sup> が一手に担い、歴史・自然資源を魅力とした観光を行っている。一方、行政側はグリーンツーリズムという自然資源と農業を混ぜた体験型の観光を行うことを目的としており、農山村の魅力を押し出している。グリーンツーリズムを推進する協議会のメンバーには各地区の自治会や阿武隈ライン保勝会の代表者も含まれており、今後観光と定住を繋ぐ役割も担っていくのではないだろうか。

新規住民の誘致や定住に関しては行政の役割は大きいと強調されている。だが、丸森町ではむしろ行政側の役割を小さくすることで自治会が独自に動きやすくなり、移住希望者を受け入れる適切な環境が作られていた。

## 2. 新規住民定住の理由

筆甫地区に新規住民が多い理由、そして定住を可能にした理由は2つあると考える。

一つは筆甫地区の自然景観、人間性である。棚田、小川、緑濃い山々、「自立」を重視する一方、個々のやり取りを大切にしている人々である。もう一つは筆甫地区の位置である。県道からも分かるように、ある意味閉鎖的な空間である。だが福島や仙台まで車で1時間の距離、全く切り離されているわけではない。人がいなくなるのが良く分かる地区とは、即ち人がどこにいいのか良く分かる地区である。

また新規住民同士が固まっているわけでもなく、地域住民と積極的に関わろうとする姿勢が見られた。丸森町における新規住民の先駆け的存在である、小斎地区に住む新規住民Eさんは「点ではなく線」だと述べる。「我々新規住民は点ではなくて、線で繋がっているという意識を持っている。それは、新規住民の誰か一人でも良くない行いをすればそれは新規住民全員への不信へと繋がるからだ」。このように自分は新規住民であるということを念頭に置き生活しているのである。新規住民のAさん、Dさんから似た意見を得た。「移住者（新規住民を指す）はどこまで行っても移住者で、地域の人と全く一緒にはなれない。そのことはしょうがないことだし、別にマイナスなことばかりではない。受け入れている」、「故郷はここではないけれど、子どもたちにとってはここが故郷になるのかもしれない」という。新規住民となることは、地域住民と関わりを持つことだが、即ち地域住民に同化することではないと考えられる。

## 3. 調査者と被調査者

慣れ親しんだ土地に血縁でなく地縁もない余所者が入ることは地域住民にとって筆者の想像する以上の負担を強いるだろう。しかし、丸森町では地域住民が新規住民を暖かく迎え入れている光景を目にした。新規住民を受け入れることは、人口減少による地域衰退を食い止めるための、やむをえない選択だったのかもしれない。だが、そこでは地域とは地縁・血縁で構成されるのではなくて人間同士の関わり合いで成り立つことが証明されていた。新規住民Dさんに車で送っていただいた時、道を歩く子どもがいた。するとDさんはわざわざ車を寄せ二言程話しかけた。何気ない日常の一コマだが、それが筆甫地区で暮らすことの安心感にも繋がっているように思えた。

また、今回このような調査を経験し、聞き取り調査という手法について疑問も持った。筆者は始め「移住者」という言葉で聞き取り調査を行った。だがある新規住民の方は自らの事を「新規住民」という言葉で説明していた。今回新規住民と称することにしたのは、外部からの押し付けではなく、現状の生きている人々に寄り添いたいと思ったからだ。調査で「移住者」というカテゴリーで分け、現在地域に溶け込んでいる方々に「移住者」、「地元民」という区別を押しつけるのは彼らの負担となるのではないだろうか。今後は調査する側が何を返していけるのかをもっと意識し考えながら調査に臨みたいと思う。

謝辞 この度は調査にご協力いただき、大変感謝しております。また、突然お伺いするという無礼もお許し下さった上に親切に対応して下さい、ありがとうございました。記述や認識に間違いがあるかもしれませんので、その時はどうぞ指摘下さいますようお願い致します。

### 注

- 1) クラインガルテン：家族あるいは個人専用の長期滞在可能な小舎（コテージ）と菜園との組み合わせが最小単位（区画）を形成し、地域外からの利用者を想定し、地域もしくは公的機関、自治体が運営する一定規模以上の菜園を有する市民農園であり、ドイツの農地賃借制度から生まれた滞在型市民農園の形態の一つである。
- 2) 丸森型グリーンツーリズム：阿武隈ライン舟下り、不動尊公園キャンプ場、滞在型市民農園（クラインガルテン）に代表される「自然休養型観光」、齋理屋敷を中心とした「歴史・文化体験型観光」、そこで提供される自然や農の「学習・体験型イベント」、直売所、農家・林家レストラン、そば打ちなど町民との「ふれあい交流」、「おもてなし」の総体。
- 3) 例えば、地域活性化に関しては次のような意見交換が交わされていた。ブルーベリー販売を事例としてあげる。地域活性化に向けた特産物の生産においては、価格決定後の段階で他地区との調整が必要になる。他地区が自分の地区の価格より安く生産物を販売しているのなら、同様の値段で販売せざるをえなくなり、結果的に運営事態が危うくなっていく。そうした地区間での「足の引っ張り合い」を何とかしたいと考える地域住民もいたが、なかなか合意を結ぶのは難しいようであった。

しかしこうした生産物の売買競争は各地区の特産物生産量低下を巻き起こしかねない。それぞれの地区が生産物を特化させていくような競争へと繋がれば良いが、価格低下競争へと向かえば共倒れしてしまう可能性がある。このような小さな共同体の中では、各地区が特産物を維持するためにある程度の合意形成は必須だと考える。

旧市町村から成る 8 つの地区があり、多様性を見せる丸森だが、地区同士の境界は未だ根強く残っている印象を受ける。地区ごとの特色が現れれば現れる程、地区間の競争へと繋がり、協調することが難しいように感じられた。

- 4) 阿武隈ライン保勝会：丸森町の観光を担う財団法人。阿武隈ライン舟下りをはじめ、齋理屋敷、国民宿舎あぶくま荘の管理・運営を担っている。

### 文献

- 河北新報社編集局「ニッポン開墾」取材班 2009.『ニッポン開墾—中山間地からの発信—』河北新報出版センター.
- 小金澤孝昭・奥塚恵美 2008. 農業への新規参入における地域定着条件：宮城県丸森町を事例として. 宮城教育大学紀要 43: 1-10.
- 丸森町総務課 2007.『まるもりまちデータブック 2007 数字でみる丸森町』.
- 宮城県丸森町 2006.『第四次丸森町長期総合計画 平成 18 年度～平成 27 年度』宮城県丸森町.
- 山本泰裕・重村 力・寺嶋卓也・正井陽子・内平隆之・佐藤由香・山崎寿一 2001. 中山間地域・朝来町の都市農村交流施策と滞在型市民農園：兵庫県朝来町滞在型市民農園「クラインガルテン伊由の郷」の研究（その 1）. 日本建築学会学術講演梗概集（関東） E-

2 分冊: 595-596.

**参照ホームページ**

丸森町ホームページ <http://www.town.marumori.miyagi.jp/>

宮城県ホームページ <http://www.pref.miyagi.jp/index.htm>